

ます、より高精度化が求められる時代であって富士山の高さもより高精度な高さに生まれ変わる時代が来るかも知れません。

#### 参 考 文 献

- 鈴木弘道(2002):山の高さ,古今書院,404p.  
松崎利雄(1979):江戸時代の測量術,総合科学出版,326p.

HAKOIWA Eiichi (2003): Height of Mt.Fuji.

<受付:2003年8月21日>

## 書 評

### 新編火山灰アトラス

町田 洋・新井房夫著  
東京大学出版会  
本体価格7,400円

どんな本が出てくるのか、評者は実は戦々恐々としていた。

火山灰アトラスの最初の出版は、1992年である。わずかに10年余での改編出版である。

このようになりに短期間のうちに新編が出版された理由は、この期間に、中・前期更新世の火山灰の研究が大幅に進展したこと、放射性炭素の年代測定技術の進歩及び歴年較正法の普及などがあり、新たな年代値をまとめて記載しておく必要が出たためとされている。

今さら言うまでもなく、御二人の著者は、極めて広い範囲に分布している火山灰があることを1970年代に初めて実証した方々である。その後も、両氏も含めた多くの研究者の手によって続々と火山灰の分布や年代が明らかになり、旧版出版の運びとなった。新版の構成は、基礎編と、日本のテフラ各論の大きく2つに分けられており、基礎編は、テフラを生む噴火の説明、テフラの同定法や年代測定法などの解説からなる。各論では、後期第四紀の広域テフラ、日本各地の後期第四紀テフラ、中・前期更新世の広域テフラ、日本列島周辺の海底テフラなどのデータが整理されて記載されている。付録として、海外の大規模テフラ、日本の第四紀広域テフラの火山ガラスの化学組成、及び日本の代表的広域テフラの顕微鏡写真がつけられている。新版、旧版を通じて、この構成には大きな変化はない。データはどんどん蓄積されてきているので、総ページ数は、276から336に増えている。新版に際立って増えた記載は、中・前期更新世の広域テフラ(旧版では第四紀中期の広域テフラ)の部分である。また、巻頭のカラー写真は、新旧版の枚数はほとんど同じであるが、ほぼ全面的に差し替えられている。新版の巻末の著者紹介のページに、露頭を前にした著者の最近の写真が載っている。暖かい本になった。

火山灰の研究者の属する分野は、分類の範疇が変であるが、火山、第四紀、農学、考古学などであろう。では、研究成果はどのように利用されるのであろうか。

火山の分野では、個々の火山の発達史、活動様式の変化、噴火メカニズム、相対的噴火年代の推定などに、第四紀では対比と地形発達史などに、農学では、作物の適否の判断や土壌改良などに、考古学では年代の推定などに使用するものと思われる。これらのうち、すぐに世の中の役に立つのは、何と言っても農学分野であろう。

その次に役に立つ可能性を強いてあげれば、災害問題であろうか。ただし火山灰の災害は、頻度がそれほど大きくない。桜島では、住民に深刻な影響を及ぼすことがあるが、徐灰が主たる仕事であって、それにはテフクロノロジーが貢献できる可能性は大きくない。火山灰粒子の特徴とそれによる健康への影響問題については、外国では多くの研究が進行中であるが、わが国ではそれほどではないようである。わが国の一般の住民にとっては、火山灰災害はとにかく低頻度で取るに足らない災害なのである。

しかしながら、いったん事が起きると、甚大な被害をもたらすことになる。したがって、そのデータをよく整理しておく必要がある。火山灰の研究者以外の人にもその実態をよく伝えるためには、火山灰のデータの電子情報化が必要と評者は考えた。したがって新版で、それがどのように表現されているか気になって仕方がなかった。新版でも、資料の電子情報化は、なされていなかった。評者はこれが重要と考えたので、旧版を利用して、独自に試みていた。結果は十分満足のいくものではなかったけれども、見通しは付いた。すなわち、役に立ちそうであるということである。

火山災害軽減の立場からは、自分のいる場所のことが重要な問題なのであって、降ってくる灰がどこの火山に由来するものであるかは、当面不問で良いことになる。そのような立場に立った火山灰の研究は例がない。ただし、そのことが、この資料集の価値を軽減するものでは全くない。このような資料集がまず初めになれば、やる気も起きなかったであろうし、アイデアも湧かなかったであろうからである。

著者やその協力者は、このようなデータ集を取りまとめることは、苦勞が多い割には、と御考えかもしれないが、間違いなくきちんと役に立っている。これからも様々な形で利用する読者が増えることを期待する。

(地球科学情報研究部門 須藤 茂)